

日本人英語学習者による他動詞の自動詞化

須田 孝司・大畑 真也

『国際関係・比較文化研究』（静岡県立大学国際関係学部）
第20巻第1号（2021年9月）抜刷

【論文】

日本人英語学習者による他動詞の自動詞化¹

須田 孝司・大畑 真也

1 はじめに

これまでの動詞に関する第二言語（L2）習得研究では、自動詞の習得に焦点が当てられている（e.g., Hirakawa, 1995; 近藤, 2019; Oshita, 2000; 佐藤, 2015; 白畑, 2015; 白畑 他, 2020; Yusa, 2000）。そしてそれらの研究では、日本人英語学習者（JLEs）が、自動詞を（1a）のように他動詞として使う誤りや、（1b）のように受動態にする誤りを報告している。

- (1) a. *The magician disappeared a rabbit.
b. *The rabbit was disappeared.

一方、他動詞の L2 習得研究もいくつかあり、例えば、近藤（2014）では、JLEs は（2）のように他動詞が自動詞として使われている英文の非文法性を正しく判断できないと提案している。

- (2) *Mary invited to the party.

（2）のように他動詞を自動詞と混同する誤りについては、研究自体の数が少ないだけでなく、その原因についてもあまり議論がなされていない。そこで本研究では、JLEs を対象に産出データを集め、JLEs が他動詞の後に自動詞のように前置詞を用いた英文を産出するかどうか調査を行った上で、他動詞の自動詞化の要因について検証する。

本稿の構成は以下のとおりである。第 2 節では、日本語と英語の動詞の分類について説明し、続く第 3 節では、他動詞に焦点をあてた先行研究を概観する。第 4 節では、

1 本稿の一部は、第20回日本第二言語習得学会国際年次大会（J-SLA2020）において発表しました。当日様々なコメントやご助言をいただいた皆様に感謝致します。

本研究の実験を紹介し、第5節でその結果を報告する。第6節では、本研究の結果をもとに JLEs が作り出す他動詞の自動詞化の誤りの要因について議論し、第7節は、本研究のまとめを述べる。

2 動詞の分類

2.1 項と意味役割

英語であれ、日本語であれ、動詞が必要とする項の数により、自動詞と他動詞に大別される (Jacobsen, 2017; 影山, 1996; Tsujimura, 2014)。例えば、自動詞が必要とする項は、(3a) のように主語として機能する名詞句 1 つのみであるのに対し、他動詞が必要とする項は、(3b) のように主語名詞句に加え、目的語となる名詞句が少なくとも1つ必要となる。

- (3) a. Taro *coughs*.
b. John *played* tennis.

(3a) は自動詞 *cough* の前に主語となる名詞句 Taro が置かれており、(3b) では他動詞 *play* の前に主語名詞句 John が置かれ、*play* の後には目的語名詞句 tennis が置かれている。

自動詞はさらに非能格動詞と非対格動詞の2つに分類される。これらの自動詞は、唯一の項として主語名詞句を必要とする点は共通しているが、それぞれ主語となる名詞句の持つ意味役割が異なる。

- (4) a. Paul *walked*.
 <動作主> 非能格動詞
b. The accident *happened*.
 <主題> 非対格動詞

(4a) の非能格動詞 *walk* では、主語名詞句の意味役割は多くの他動詞の主語と同様に『動作主』になる。一方、(4b) の非対格動詞 *happen* の場合は、主語名詞句に与えられる意味役割は『被行為者』や『主題』となる。

さらに、英語の動詞には、(5) の *break* のように自動詞と他動詞の両方で用いられる自他両用動詞がある。

- (5) a. (自動詞) The window *broke*.

b. (他動詞) I ***broke*** the window.

日本語の場合も、動詞が必要とする項の数により自動詞と他動詞に区別される²。例えば、(6a) の他動詞「食べる」は、主語名詞句と目的語名詞句の2つの項が必要であるが、(6b) の自動詞「笑う」は主語名詞句のみ必要となる。

- (6) a. 子供が そばを 食べる。
 b. 子供が 笑う。

また、日本語の自動詞にも、英語と同様、非能格動詞と非対格動詞があり、非能格動詞の場合は主語に『動作主』の意味役割を持つ名詞句が置かれ、非対格動詞の場合は『被行為者』や『主題』の意味役割を持つ名詞句が置かれる。

- (7) a. 子供が 笑う。
 <動作主> 非能格動詞
 b. 事故が 起きる。
 <主題> 非対格動詞

さらに日本語にも自他両用動詞がある。(8a) では自動詞「割れる」が使われており、(8b) では他動詞「割る」が使われている。

- (8) a. (自動詞) 窓が 割れる。
 b. (他動詞) 子供が 窓を 割る。

このように英語と日本語の動詞の分類方法は基本的に同じである。両言語とも動詞が要求する項の数により動詞の自他が判断され、さらに自動詞は主語名詞句に与えられる意味役割により、非能格動詞と非対格動詞に分かれる。

2.2 日本語の目的語名詞句

英語では、主語や目的語といった文法役割を名詞句の位置により表すが、日本語では名詞句に付加する格助詞「が」や「を」により文法役割が表される。

2 日本語の動詞の自他は、形態的に区別する方法もある (e.g., Tsujimura, 2014) が、本稿の議論では取り上げない。

- (9) a. Mary loves Tom.
b. Tom loves Mary.

英語の場合、動詞の前に置かれた名詞句が主語になるため、(9a)と(9b)では『愛している人』と『愛されている人』が逆になっている。

日本語の場合は、格助詞「が」が主語名詞句に、格助詞「を」が目的語名詞句につくことが多い。(10a)では文頭の名詞句に「が」が付加され主語になっているが、(10b)では動詞の前の名詞句に「が」が付加され主語になっている。

- (10) a. メアリーが トムを 愛している。
b. メアリーを トムが 愛している。

日本語では格助詞が文法役割の付与に影響を与えるが、(10)で示したようにすべての目的語名詞句が「を」を取るわけではない。例えば、(11a)や(11b)のように目的語名詞句に「に」や「が」が用いられる場合だけでなく、(11c)のように格助詞自体が省略される場合もある³。

- (11) a. 私たちは あなたの要求に 応えます。
b. トムは フランス語が 話せる。
c. 昨日 本(を) 読んだよ。

このように、日本語の場合は格助詞が文法役割に大きな影響を与えるが、その格助詞の情報だけでは文における名詞句の文法役割を決めることはできない。また日本語では動詞が文尾に置かれることから、名詞句があったとしてもその名詞句がどのような意味役割や文法役割を持っているのか判断することは難しい。

3 JLEs の他動詞の誤りに関する先行研究

JLEsを対象とした他動詞の習得研究は、自動詞の習得研究より多く行われてはいない。しかし、他動詞の直後に不要な前置詞を用いている英文の文法性の判断について検証している研究がいくつかある(近藤, 2014; 中西, 2018)。

近藤(2014)では、JLEsが他動詞を自動詞として用いた非文法的な英文を容認するかどうか調査を行った。その研究では、83名のJLEsを初級、下中級、上中級の3

3 日本語の(10)のような二項動詞の他動詞文においては、目的語名詞句に「を」を伴うことが一般的であり(Tsujimura, 2014; 柳田, 2014)、英語の他動詞文に対応する日本語の他動詞文においても、一般的に「を」を用いて訳されることが多い(高見, 2018)。

日本人英語学習者による他動詞の自動詞化

つの習熟度グループに分け、文法性判断タスクを実施した。実験では、参加者にコンテキストのある英文を与えた上で、(12a)のように他動詞を自動詞として用いた非文法的な英文と、(12b)のように他動詞を受動態構造で用いた文法的な英文を提示した。参加者には、それらの英文の文法性を非文法的である「-2」から文法的である「2」の4つの尺度で判断してもらった。

- (12) a. *She invited to a personal interview. -2 -1 1 2
 b. She was invited to a personal interview. -2 -1 1 2

実験の結果、習熟度により文法性の判断に差があり、初級レベルのJLEsは、他動詞を自動詞として用いた非文法的な英文(12a)を誤って正しいと判断する割合が多くなることがわかった。また、実験では10個の動詞を使用したがる、動詞ごとの許容率に差があり、ほぼすべての参加者が正しく判断できる動詞と、習熟度が高くなったとしても誤りが見られる動詞があることが明らかになった。

近藤(2014)では、初級レベルのJLEsが他動詞を自動詞として扱う誤りや、動詞により文法性の判断に差が見られたが、その要因については特に言及されていない。そこで本研究では、JLEsの他動詞の自動化に関する誤りに焦点を当て、その要因について検証する。

4 実験

4.1 仮説

英語では語順により主語や目的語といった文法役割が決まるが、日本語では格助詞により主語と目的語が区別されることが多い。本研究では、JLEsの動詞の自他の区別に関して、目的語に付加する格助詞の影響について(13)に示す2つの仮説を立て、実験を行う。

- (13) a. 仮説1: JLEsは、目的語名詞句に格助詞「を」が付加される動詞を他動詞とする。
 b. 仮説2: JLEsは、英語の習熟度が高くなるにつれ日本語の格助詞の影響はなくなり、正しく英語の他動詞を使用できるようになる。

日本語の目的語には格助詞「を」以外に、(14)や(15)のように格助詞「に」や後置詞「について」なども付加される。

- (14) a. メアリーは その質問に 答えた。
b. Mary answered the question.
- (15) a. トムは その問題について 議論した。
b. Tom discussed the issue.

したがって、もし JLEs が、日本語の格助詞「を」に依存し動詞の自他を判断しているとすれば、目的語名詞句に「を」がついた場合は動詞を他動詞として使用し、「を」以外の助詞が使用された場合は自動詞として使用することが予測される（仮説1）。

また、近藤（2014）では、JLEs の動詞の自他の区別には習熟度が影響していると提案している。もしその提案が本研究に当てはまるとすれば、習熟度の低い JLEs には日本語が影響し、目的語名詞句に「を」がつく場合は動詞を他動詞として使用し、「を」以外の助詞の場合は自動詞として使用する。また、習熟度が高くなるとそのような日本語の影響はなくなり、他動詞を他動詞として正しく使用できるようになると予測される（仮説2）。

本研究ではこれら2つの仮説を検証するため、以下のような実験を行った。

4.2 予備調査

4.2.1 参加者

本実験の前に、本実験で用いる英語の動詞を選ぶ予備調査を行った。本研究では、JLEs の英文産出における日本語の格助詞「を」の影響を検証するため、本実験で使用する英語の動詞の日本語訳として、JLEs が格助詞「を」を用いるかどうか調査を行った。この予備調査には、本実験には参加しない7名の JLEs が参加した。予備調査の参加者の海外滞在経験の有無や、英語の習熟度については考慮しなかった。

4.2.2 調査方法

予備調査では（16）に示す32個の英語の動詞を使い、英文翻訳タスクを実施した。

(16) 予備調査で用いた他動詞

accept, accompany, answer, approach, ask, bring, contact, damage, destroy, employ, fire, hire, inhabit, introduce, invite, know, mention, oppose, publish, reject, resemble, respect, consider, enter, inform, obey, select, reach, use, visit

英文翻訳タスクでは、(17) のように日本語の文脈とともに英文を提示し、参加者には下線が引いてある英文を日本語に訳すよう求めた。

日本人英語学習者による他動詞の自動詞化

- (17) 私たちの住む地域には、蜚が生息する川がある。それを埋める計画が進行していたので、We opposed the plan.

例えば、(17)の英文に対しては、(18)のような2種類の訳が考えられる。予備調査では、その回答をもとに2つの動詞タイプに分けた。

- (18) a. 私たちは、その計画を反対した。 ⇒ 動詞タイプ1
 b. 私たちは、その計画に反対した。 ⇒ 動詞タイプ2

予備調査では、参加者7名中5名以上が、回答例(18a)のように動詞の直前に「を」を書いた場合は『動詞タイプ1』と分類し、(18b)のように「を」以外を書いた場合は『動詞タイプ2』と分類した⁴。

4.2.3 結果

参加者の回答を分析した結果、表1のように動詞タイプ1に18個の動詞が、動詞タイプ2に13個の動詞が分類された。

表1 予備調査にもとづく動詞の分類結果

動詞タイプ1 (「を」)			動詞タイプ2 (「を以外」)		
accept	bring	build	answer	approach	ask
consider	damage	destroy	contact	enter	hit
employ	fire	hire	inform	inhabit	mention
introduce	invite	know	obey	oppose	reach
publish	reject	respect	resemble		
select	use	visit			

この分類結果をもとに、本実験で用いる動詞を各動詞タイプより10個選んだ。選ぶ際は、コーパスを用いて作成された学習者向け語彙表である『日本人中高生語彙リスト JEV/HEV』⁵を利用し、高校生が知っていると思われる動詞を選んだ。さらに、そのリストにある語彙学習における優先順位を活用し、その順位の平均値が両動詞タイプ間で近い値になるよう調整を行った⁵。本実験で用いる動詞タイプ1と2の10個の動詞を表2に示す。

4 日本語訳にばらつきがあった accompany は、どちらのタイプにも分類しなかった。

5 『日本人中高生語彙リスト JEV/HEV』には、語彙学習における優先順位が示されているが、本研究では、両動詞タイプの順位の平均値が近くなるように10個の動詞を選んだ。

表2 本実験で用いた動詞

動詞タイプ1 (「を」)		動詞タイプ2 (「を以外」)	
accept	hire	answer	hit
consider	invite	approach	inform
damage	publish	ask	mention
destroy	reject	contact	oppose
employ	select	enter	reach

4.3 本実験

4.3.1 参加者

本実験の参加者は、予備調査に参加していない JLEs の大学生100名である。参加者は TOEIC Listening & Reading のスコアをもとに、650点以上の参加者を上位群、540点未満の参加者を下位群に分けた。なお、TOEIC のスコア情報を得られなかった5名は分析の対象から除いた。また、習熟度の差を明確にするため、TOEIC のスコアが545点から645点の間の45名もその後の分析から除外した。したがって、表3のように、上位群と下位群の各25名の計50名のデータを分析した。

表3 習熟度別の参加者

	人数	平均点	標準偏差	最高点	最低点
上位群	25	739.4	73.52	940	650
下位群	25	475.44	49.83	540	350

4.3.2 実験方法

本実験のデータは、和文英訳タスクにより集めた。参加者には、(19) のような日本文を提示し、その下線部の日本文を指定動詞を用いて英語に訳すよう求めた。

(19) 道が混雑していたので、私たちは真夜中にホテルに到着した。

(指定動詞：reach)

問題は、動詞タイプ1、動詞タイプ2、それぞれ10問あり、その他にフィラーとして5問用意した。参加者が、動詞の直後に名詞句を置き、指定動詞を他動詞として使用していた場合は1点、それ以外の回答は0点として集計した。

5 結果

動詞タイプごとの習熟度別の正用率を表 4, 及び図 1 に示す。

表 4 動詞タイプ別正用率

		動詞タイプ 1	動詞タイプ 2
正用率 (正用数/総産出数)	上位群 (N=25)	89.6% (224/250)	56.8% (142/250)
	下位群 (N=25)	82.4% (206/250)	66.4% (166/250)

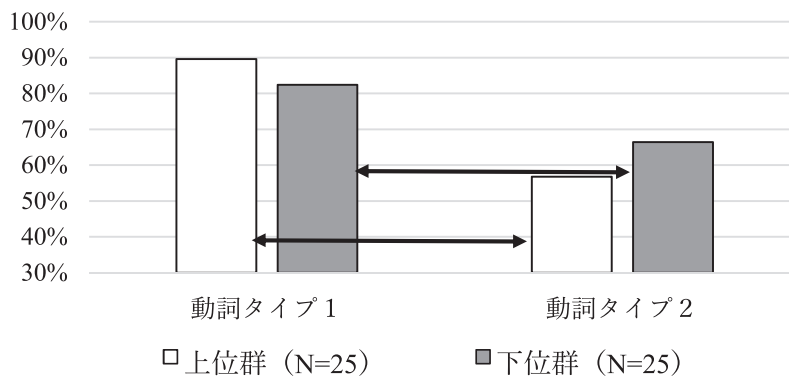


図 1 動詞タイプ別正用率

表 4, 及び図 1 から, 上位群では, 動詞タイプ 1 の正用率が 89.6%, 動詞タイプ 2 の正用率が 56.8% であり, 動詞タイプ 1 を正しく用いることができることがわかった。また下位群についても, 動詞タイプ 1 の正用率が 82.4%, 動詞タイプ 2 が 66.4% であり, 同様の傾向が見られた。この結果について, 習熟度×動詞の 2 要因分散分析を行ったところ, 交互作用に有意差があり ($F(1, 48) = 12.540, p < .001$), ライアン法による多重比較の結果, 本実験の参加者は, 習熟度にかかわらず, 動詞タイプ 1 の動詞を正しく他動詞として使うことが明らかになった。

次に, 同じタイプの動詞間の正用率に差があるかどうか検証を行う。動詞タイプ 1 の動詞別正用率を図 2 に示す。

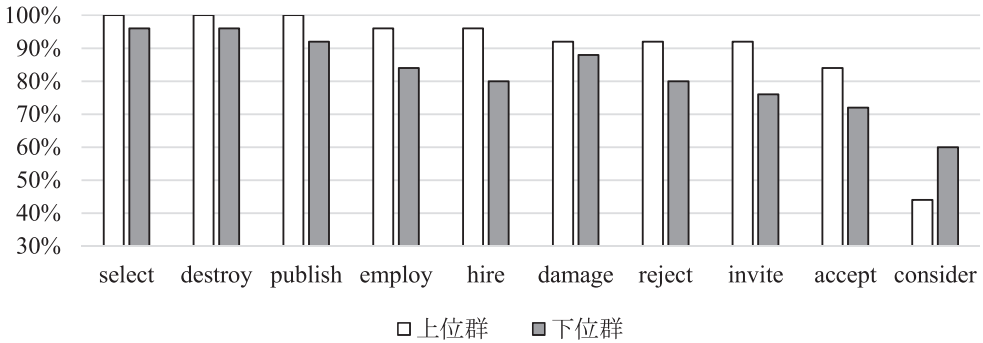


図2 動詞タイプ1の動詞別正用率

図2より、invite, accept, considerを除く7つの動詞は、習熟度にかかわらず80%を超える正用率であることがわかる。2要因分散分析を行った結果、動詞間には有意差があったが ($F(9, 432) = 9.702, p < .001$)、習熟度には有意差はなかった ($F(1, 48) = 3.256, p = .0774$)。また、交互作用も観察されなかった ($F(9, 432) = 1.168, p = .3138$)。多重比較の結果、considerの正用率は他のすべての動詞の正用率と比較し有意に低いことがわかった (select/destroy/publish/employ/hire/damage/reject/invite/accept > consider)。また、acceptの正用率もselectとdestroyと比べて低いことも明らかになった (select/destroy > accept)。

このようなことから、本実験の参加者は、動詞タイプ1に関してはselectとdestroyを正しく用いることができる一方、considerとacceptを他動詞として使用することが困難であることがわかった。

動詞タイプ2の動詞別正用率を図3に示す。

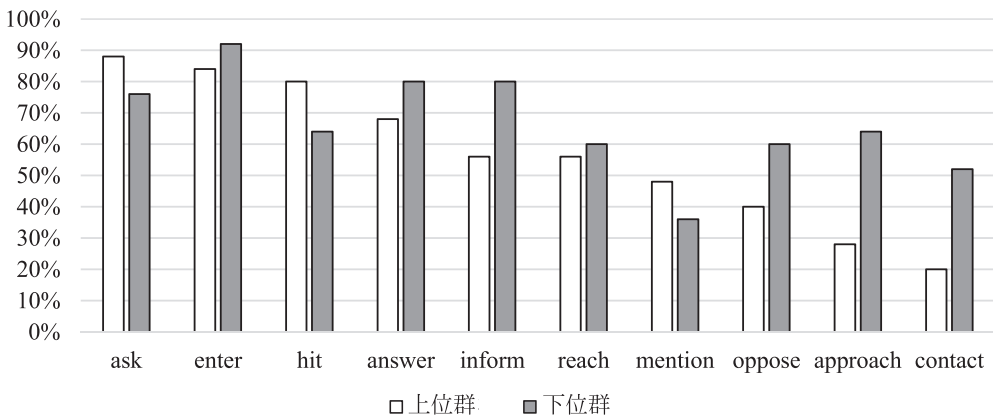


図3 動詞タイプ2の動詞別正用率

図3より、ask や enter については上位群、下位群ともに70%以上の正用率であるのに対し、他の動詞については、習熟度により正用率に差があるように見える。2要因分散分析の結果、交互作用に有意差が観察された ($F(9, 432) = 2.486, p < .01$)。多重比較を行ったところ、上位群については contact と approach の正用率が ask, enter, hit, answer の正用率よりも低く (ask/enter/hit/answer > approach/contact), また oppose の正用率は ask, enter, hit よりも、mention の正用率は ask よりもそれぞれ有意に低いことがわかった (ask/enter/hit > oppose; ask > mention)。

下位群についても同様に分析を行うと、mention の正用率は ask, enter, answer, inform より低く (ask/enter/answer/inform > mention), contact の正用率は enter より低いことが明らかになった (enter > contact)。

したがって、本実験の上位群は、日本語では「を」が使われない場合であったとしても、ask, enter, hit, answer は他動詞として正しく使用することができるが、contact と approach や oppose と mention は自動詞として使う割合が高くなることがわかった。また、下位群の場合は、ask, enter, answer, inform を他動詞として使用することができる一方、mention と contact は自動詞として用いる傾向があることが明らかになった。

6 議論

6.1 仮説の検証

本研究では、英語の他動詞を日本語で格助詞の「を」を用いて訳す傾向にある動詞タイプ1と、「を」以外の助詞や後置詞を用いて訳す傾向にある動詞タイプ2に分け、JLEs が日本語の格助詞「を」の情報をもとに英語の動詞の自他を区別しているかどうか検証を行った。

仮説1では、JLEs が日本語の格助詞の情報を頼りに動詞の自他を判断しているとすれば、JLEs は動詞タイプ2よりも動詞タイプ1を正しく他動詞として使用すると予測した。本実験の結果、JLEs は動詞タイプ1の動詞を正しく他動詞として使うことができることから、仮説1は支持されたとと言える。

仮説2では、JLEs は習熟度が高まると日本語の影響が少なくなり、英語の他動詞を自動詞として用いる誤りは少なくなると予測した。本実験の結果からは、習熟度により動詞の正用率に差が見られなかったことから、仮説2を支持することはできないと結論づけられる。しかし、動詞タイプ2の各動詞の正用率に着目すると、いくつかの動詞において習熟度による差があった。今後より詳細な分析が必要であると考えられる。

6.2 JLEs の誤りの要因

本研究では、JLEs が英語の他動詞を自動詞として使用する誤りに焦点を当ててい

るが、この他動詞の自動詞化の誤りは1つの要因だけでは説明が難しい。ここでは、本実験に参加した100名のJLEsのうち、TOEICのスコアの情報が得られなかった5名を除く95名の回答を分析し、他動詞の自動詞化の誤りの要因について検証する。

6.2.1 日本語の影響

本実験で使用した動詞タイプ1の動詞は目的語名詞句に「を」をつけ、動詞タイプ2では「を」以外の助詞や後置詞を取ると考えられる。ここでは、特に誤りの多かった他動詞に着目し、それらの動詞がどのような前置詞を伴っていたのか見ていく。

動詞タイプ1で最も正用率の低かったconsiderは、表5に示すように、その直後にaboutが置かれる誤りが多かった(38人/95人)。また、動詞タイプ2のmentionにおいても、その直後にaboutをつける誤りが見られた(39人/95人)。

表5 不必要に用いられた前置詞、及びその数 (consider, mention)

動詞	前置詞	数	動詞	前置詞	数
consider	about	38	mention	about	39
	to	8		to	12
	with	2		at	2
	of	1		of	1

このaboutをつける誤りは、日本語の「について」という後置詞が影響したと考えられる。実験では、(20)のような日本語が使われ、その英語訳を書くよう指示が与えられた。

- (20) a. 彼女は 自分の将来について 考えた。 (指定動詞：consider)
 b. 彼は その解決策について 述べた。 (指定動詞：mention)

予備調査においてconsiderの日本語訳を答えてもらう際、She considered her futureという英文を使用した。予備調査の参加者は、その英文を「彼女は自分の将来を考えた」のように「を」を使って日本語に訳していたため、動詞タイプ1と分類した。しかし、本実験ではより自然な日本語にするため、「を」ではなく「について」という後置詞を使って問題文を提示した。このような日本語の操作がJLEsの判断に影響し、他動詞considerやmentionにaboutをつける誤りが産出されたと考えられる。

動詞タイプ2では、approach, contact, opposeに表6のような前置詞をつける誤りが観察された。特にtoを取る誤りが多かった。

表 6 不必要に用いられた前置詞, 及びその数 (approach, contact, oppose)

動詞	前置詞	数	動詞	前置詞	数	動詞	前置詞	数
approach	to	36	contact	to	39	oppose	to	39
	at	3		with	16		about	1
	for	1		at	1		at	1
		for		1	on		1	
				on	1			

中学の教科書などでは, to に対応する日本語表現として「に」が与えられており (e.g. New Crown English Series 1), 本実験でも, それらの動詞が指定動詞として指示されていた日本語では, (21) のように動詞の直前に「に」が使われていた。JLEs は, 「に」に to を当てはめる傾向にあると思われる。

- (21) a. 二人の店員が その少女に 近づいた。 (指定動詞: approach)
 b. 彼は 駅員に 連絡した。 (指定動詞: contact)
 c. 私たちは その計画に 反対した。 (指定動詞: oppose)

このように JLEs の他動詞の習得には, 日本語の助詞や後置詞の影響が見られる。英語の前置詞を学習する際, 『about=について』のように日本語表現と一緒に覚えることや, 動詞の使い方を学ぶ際, 『～に行く=go to』のように, 「に」と「行く」という表現と一緒に覚えることがある。自動詞を覚える際はそのような学習方法は効果的かもしれないが, 他動詞の場合は, 『～について議論する=discuss≠discuss about』のように, 後置詞と動詞をセットにして英語の動詞を指導することや, 必ずしも日本語表現と英単語は一対一対応にはならないということを意識させるなど, 指導を行う際の工夫が必要であろう。

6.2.2 共起表現の影響

動詞タイプ 1 の中で accept は比較的誤りの多い動詞である。この動詞は「～を受け入れる」という日本語で訳されるため, 日本語の「を」が誤りを引き起こしたとは考えにくい。そこで, ここでは動詞と一緒に使われる共起表現について検討していく。

他動詞 accept の誤りとして, accept の直後に to を使った誤りがいくつか見られた。accept の用法を調べてみると, accept はその直後に目的語名詞句を取るだけでなく, (22) のように不定詞を取ることができる。

- (22) Can you *accept to* do this?

したがって、JLEsは(22)のような *accept* の不定詞用法 (*accept to do*) を覚えており、*accept* の後に *to* が来ると勘違いしている可能性が考えられる。

また、このような他の用法を応用する誤りは、他の動詞にも見られる。例えば、*accept* と同じ動詞タイプ1に分類された *invite* であるが、この動詞からもその直後に *to* をつける誤りが散見された。この動詞は(23a)のように受身形で使われる際、*to* と共起する。また他動詞として直接目的語を取った場合でも(23b)のように *to* を伴って使用されることが多く、*to* との共起頻度がかなり高い動詞である。

- (23) a. John was *invited to* the party.
b. Mary *invited* Tom *to* the party.

したがって、他動詞であったとしても他の用法において特定の前置詞や不定詞を取る場合、インプットにおける共起頻度が高まり、特定の前置詞を使う誤りが多くなると思われる。

さらに、今回の実験で使用された動詞の中には、動詞としてだけでなく、同じ形で名詞としても使用されるものもある。例えば、動詞タイプ2の *approach* や *contact* は、(24)のように名詞としても用いられる。

- (24) a. This is the fastest *approach to* the town.
b. We made *contact with* our friends.

JLEsは、このような名詞+前置詞といった共起表現のインプットを多く受けており、そのインプットが他動詞の使用に影響を与えている可能性が考えられる。

この共起表現の影響を検証するため、高等学校で使用されているコミュニケーション英語の3学年分の教科書(13種類)の本文データを調べ、*approach* と *contact* の2つの単語がどのような前置詞と一緒に使用されているか調査を行った。表7にその結果を示す。

表7 高校の教科書における **approach** と **contact** の使用状況

	総数 (動詞+名詞)	上位5つの前置詞	
approach	51	to	4
		in	1
		of	1
contact	45	with	12
		in	2
		at	1
		between	1
		over	1

高校の教科書39冊を調べた結果、**approach** は全部で51回使用されており、そのうち **to** との共起が4回あった。また **contact** の使用回数は45回であったが、そのうち **with** との共起回数は12回であった。4回や12回という回数が多いとは決して言えないが、**approach to** や **contact with** は教科書以外においても目にする表現であり、そのような共起表現が JLEs の他動詞の習得に影響を与えていると考えることができる。

6.2.3 語彙学習の弊害

動詞タイプ1の **reject** は、下位群の JLEs でも80%程度の割合で正しく他動詞として使うことができていたが、**reject** の誤りを観察すると **reject** の後に **to** を置く誤りが多かった。**reject** の用法には、**accept** や **invite** のように **to** 不定詞や前置詞の **to** と共起する表現はなく、また **approach** や **contact** のように名詞として **to** と一緒に使われることもない。したがって、これまでの議論では、この誤りの理由について説明できない。ここでは、多くの JLEs が採用している語彙学習の観点からこの誤りの要因を考えたい。

学習者が英語の単語を覚える際、1つ1つの単語を日本語の意味と結びつけて覚える方法以外に、同じような意味の単語を列挙して覚える方法がある。例えば、「(事件や事故) が起きる」であれば、**take place**, **happen**, **occur** などというように1つの日本語表現に対していくつかの単語を覚える方法である。

ここで問題となっている **reject** は「拒絶する」「断る」という意味であり、**reject** を覚える際、**refuse** や **decline** などと一緒に覚えることがあるかもしれない。その3つの動詞の使い方に着目すると、その3つの動詞は他動詞であり、(25) のように直後に目的語名詞句を置くことができる⁶。

6 その3つの動詞にはニュアンスに差があり、**reject** の方が **refuse** や **decline** より強い拒否感を示す。

- (25) a. John *refused* her proposal.
 b. John *rejected* her proposal.
 c. John *declined* her proposal.

しかし、*reject* と *refuse/decline* は全く同じ構造を取るわけではない。*refuse* や *decline* は、(26a) のように目的語名詞句の他に *to* 不定詞を取ることができるが、*reject* は (26b) のように不定詞を取ることができない。

- (26) a. John *refused/declined to* make a speech.
 b. *John *rejected to* make a speech.

今回の実験で観察された *reject* の直後に *to* を置く誤りは、JLEs が *reject* を学習する過程において、似たような意味を持つ動詞として *refuse* や *decline* を覚えていただけではなく、*reject* も *refuse* や *decline* と同じ構造を持つことができると誤って学習していたため起こったと考えられる。単語を指導する際は、同じような意味を持つ単語であったとしても、構造に関しては異なる（場合がある）ということ意識させる必要があるであろう。

7 おわりに

これまでの L2 習得研究では、とりわけ自動詞の誤りに焦点を当てた研究が行われているが、本研究では、大学生の JLEs を対象に、英語の他動詞の習得を調査し、他動詞を自動詞のように用いる誤りの要因について議論を行った。JLEs の和文英訳を分析すると、JLEs は格助詞「を」がつけられる場合は、正しく英語の他動詞を他動詞として使用することができるが、「を」以外の助詞や後置詞がつく場合は、他動詞を自動詞として使用することが多くなることが明らかになった。また、他動詞の自動詞化の誤りには、日本語の助詞や後置詞の影響だけではなく、共起表現の有無やインプットの頻度、語彙学習における覚え方など、学習者に与えられるインプットや学習方法なども影響している可能性が示された。

JLEs の他動詞の習得には、本研究で議論したいくつかの要因が関係していると思われるが、なぜ JLEs は異なる要因の影響を受けるのか、習熟度によりどの要因が大きく作用するのかなど、JLEs の他動詞の習得についてより詳細な検証が必要である。また、日本語を提示した上で英語に訳してもらった翻訳タスクでは、日本語の影響が大きく表れてしまうことが指摘されているため（白畑 他, 2010）、今後は実験方法についても改善が求められる。さらに、他動詞だけではなく、同じ JLEs を対象として自

動詞の知識も調べることにより、JLEsの動詞の習得、特に自動詞と他動詞の区別に関して議論を深めることができるであろう。

参考文献

- Hirakawa, M. (1995). L2 acquisition of English unaccusative constructions. In MacLaughlin, D. & McEwen, S. (Eds.), *Proceedings of the 19th Annual Boston University Conference on Language Development*, 291-302. Somerville, MA: Cascadilla Press.
- Jacobsen, W. M. (2017). Transitivity. In Shibatani, M., Miyagawa, S. & Noda, H. (Eds.), *Handbook of Japanese Syntax*, 55-95. Amsterdam: Mouton De Gruyter.
- 影山太郎. (1996). 『日英語対照研究シリーズ (5) 動詞意味論』東京: くろしお出版.
- 神戸大学石川慎一郎研究室. (2014). 『日本人中高生語彙リスト JEV/HEV』
<http://language.sakura.ne.jp/s/voc.html>
- 近藤隆子. (2014). 「第二言語習得における他動詞の誤り: 自動詞構造の過剰般化」『中部地区英語教育学会紀要』第43巻, 65-72.
- 近藤隆子. (2019). 「第二言語学習者による自動詞の習得: 統語構造と動詞の完結性の観点からの検証」白畑知彦・須田孝司 (編) 『第二言語習得モノグラフシリーズ 3 言語習得研究の応用可能性: 理論から指導へ』, 31-68. 東京: くろしお出版.
- 中西淳. (2018). 「学習者コーパスを用いた日本人英語学習者の前置詞誤用パターンの抽出」『統計数理研究所共同レポート400』, 83-96.
- Oshita, H. (2001). The unaccusative trap in second language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition* 23, 279-304.
- 佐藤恭子. (2015). 『非対格動詞の受動化の誤用はなぜ起こるのか: *An accident was happened.をめぐって』広島: 溪水社.
- 白畑知彦・若林茂則・村野井仁. (2010). 『詳説 第二言語習得研究: 理論から研究法まで』東京: 研究社.
- 白畑知彦. (2015). 『英語指導における効果的な誤り訂正: 第二言語習得研究の見地から』東京: 大修館書店.
- 白畑知彦・近藤隆子・小川睦美・須田孝司・横田秀樹・大瀧綾乃. (2020). 「日本語母語話者による英語非対格動詞の過剰受動化現象に関する考察: 主語名詞句の有生性と動詞の完結性の観点から」白畑知彦・須田孝司 (編) 『第二言語習得モノグラフシリーズ 4 第二言語習得研究の波及効果: コアグラマーから発話まで』, 31-54. 東京: くろしお出版.
- 高見健一. (2018). 「他動詞表現と自動詞表現の意味の違い」『英語学を英語授業に活かす: 市河賞の精神を受け継いで』, 177-195. 東京: 開拓社.

- Tsujimura, N. (2014). *An Introduction to Japanese Linguistics*. Chichester: Willey-Blackwell.
- 柳田優子. (2014). 「言語類型論からみた上代日本語の主語表示・目的語表示: 「ガ」と「ヲ」と「ゼロ」表示について」『日本語学』第33巻14号, 124-137. 東京: 明治書院.
- Yusa, N. (2003). 'Passive' unaccusatives in L2 acquisition. In Patricia, M. C. (Ed.), *Japanese/ Korean Linguistics, 11*, 246-259. Stanford, CA: CSLI.